

教授就任に際して

ご挨拶

石本健太

2025年4月より数学教室に着任いたしました。この紙面をお借りし、同窓会会員の皆様にご挨拶申し上げます。私は、京都大学理学部を卒業後、理学研究科に進学し、数理解析研究所の山田道夫先生のもとで学位を取得しました。専門は応用数学で、流体力学と数理生物学にまたがる複雑現象の数理モデリング研究を主に行ってています。学位取得後は、京都大学白眉センターと東京大学数理科学研究所で特任助教としてお世話になり、2019年から昨年度までは数理解析研究所に准教授として在籍しておりました。

博士課程1年の夏、当時のグローバルCOEプログラム「数学のトップリーダーの育成—コア研究の深化と新領域の開拓」の支援のもと、3ヶ月英国オックスフォード大学数学研究所に滞在する機会を得ました。ホストを引き受けてくださった Eamonn Gaffney 先生とは、現在も共同研究を行う仲であり、振り返ってみると、私の研究の方向性を決定づけた出来事だったのかと思います。数学研究所内には、Gaffney 先生の所属する数理生物学センター(WCMB)、そして産業数学の研究センター(OCIAM)があり、数学と諸科学間の垣根の低さが、特に印象に残りました。Gaffney 先生に連れられて、学内・学外の生物系・医学系の研究室を訪問し、(専門的な上に、ネイティブ同士で早口な英語にときどき目眩を起こしながらも) ときには一緒に実験・観察をしながら、新しい数理の問題を見つけていくという研究アプローチも体験することができました。

帰国後、滞在時に学んだことを実践すべく、国内の生物系の研究室を訪問したり、あるいは自ら実験室を作って(簡単な)観察・実験をしたりするなど、私なりに分野融合型数理科学研究の方向性を模索してきました。理論的な研究に加え、大型計算機を使った大規模数値シミュレーション、そして最近ではデータ科学的手法を用いた数理モデリングにも取り組んでいます。私の専門としている細胞遊泳の問題に関しては、実験研究者から相談を持ちかけられることも増えてきました。周りを見渡しても、これまで数理的アプローチが乏しかった学問分野において、少しづつ数学が浸透しつつあることを実感しています。

教室運営に関しては、教室の果たすべき多様で多層的なミッションの前に、自分の未熟さを痛感する日々です。教室の発展に貢献できるよう努力してまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。